

Contents

\*\*\*\*\*

特集：郵政解散から9・11総選挙へ	1p
< 今週の”The Economist”誌から >	
”The bravery of Junichiro Koizumi” 「小泉純一郎の勇気」	8p
< From the Editor > 「刺客と教育（模範解答）」	9p

\*\*\*\*\*

特集：郵政解散から9・11総選挙へ

本誌が夏休みを過ごして間に、国内政治は急展開を遂げていました。8月8日に郵政法案が参議院で否決され、衆議院は即日解散。来週8月30日には総選挙が公示されますが、この間の「ステルス作戦」、「ガリレオ演説」、そして「刺客」や「マドンナ候補者」をめぐる騒動は、あらためてここで繰り返すまでもないでしょう。

さて9月11日の総選挙に向けて、日本の政治経済はどのように展開していくのでしょうか。あらためて、この間の動きを整理してみたいと思います。

不幸なボタンの掛け違い

本誌の今年年頭号では、「2005年のキーワード、悪魔の辞典風」というおちゃらけ企画を掲載した。その中の政治関係の項目に、このようなものがあった。

東京都議会選挙

7月に実施予定。それ自体は大きな事件ではないのだが、なぜか東京都議会選挙が行われる年は政界激震となるジンクスがある。2001年は小泉政権誕生、1997年は戦後初の金融不安、1993年は細川政権誕生と自民党下野、1989年はリクルート選挙。こうなると国政選挙の予定がない2005年も、何かあるんじゃないかと、内心で期待している政治記者は少なくない。

2005年の政界は、本来、波静かなものであるはずだった。実際、今回の郵政法案についても、プロ筋といわれる人ほど直前まで「僅差で可決」を予想していた。それが参院で否決されたのは、いくつもの偶然が重なった結果にほかならない。

郵政国会と銘打たれてはいたものの、自民党の抵抗勢力は得意の「歌舞伎」もしくは「プロレス」を演じているだけであって、本気で郵政法案を葬り去るつもりは薄い、というのが筆者の認識であった。それでも党内には、小泉首相の政治手法に対する不満が鬱積し、「郵政法案を契機に一泡吹かせてやりたい」といった思いが充満していた。なにしろ小泉首相は、2006年9月の総裁任期切れとともに退陣を明言している。であれば、ここで逆らって報復措置を受けたとしても、「最長あと1年我慢すればいい」という計算が成り立つ。しかも法案採決に向けて、自民党執行部の強引な手法に非難が高まったこともあり、7月5日の衆院採決ではわずか5票差で可決となった。

この時点においても、反小泉勢力の中には「この勢いで参議院は否決だ」という思いと、「ここまで追い詰めたのだからもう十分」という思いが拮抗していたようである。実際、郵政法案は参議院を僅差で通過するという観測が多数を占めていた。

流れが変わったのは、8月1日に永岡洋治衆院議員が自殺してからである。自殺の真因は藪の中であるが、郵政法案に反対していた亀井派の議員たちとしては、「自分たちが仲間を追い詰めたかもしれない」ということは、絶対に認めることができない。これが結果的に反対派の退路を断つことになった。8月5日には、参院亀井派の中曽根弘文元文相が郵政法案への反対を宣言し、ここに小泉首相対亀井派の「KK戦争」の構図がはっきりした。

両者がチキンランから降りられなくなる中で、即・解散の覚悟を固めて、ひそかに選挙の下準備を進めていたのは小泉首相の側であった。法案否決の瞬間、小泉首相の表情は失意どころか輝いて見えたが、頭の中では開戦を告げるワグナーが鳴り響いていたかもしれない。

逆に法案反対派としては、否決の瞬間に快哉を叫んだものの、その後は「まさか解散はないだろう」という希望的観測に賭けるほかなかった。もちろん新党の手配はおろか、心の準備さえ出来てはいなかったのである。

## 解散の是非を考える

小泉首相が、法案の否決と同時に解散に打って出たことに対しては賛否両論がある。8月11日付の読売新聞紙上では、「首相のリーダーシップを考える」というテーマで対論が掲載されている。山口二郎北海道大学教授が、「小泉首相は民主政治におけるオーソドックスな指導力を発揮した。公約をもとに党を統制するのは当然」と衆院解散に肯定的な評価を与え、信田智人国際大学助教授は「説得の姿勢を欠いた小泉首相は、リーダーというよりも権力者に過ぎない」と否定的に捉えている。保守とリベラル、小泉内閣支持と不支持という両政治学者の立場が逆転しているようで、まことに興味深い。

「政策」に重点をおいて考えると、日本政治が英国流ウェストミンスタースタイルに一歩近づいたということになり、山口教授のような評価ができる。逆に「政治」に重点をおいて考えると、普通に手続きを踏んでおけば、郵政法案は可決したはずなのに、党内や国民への説得を欠いたために失敗し、それで解散するのはおかしい、という信田論になる。

両者の意見は、従来の日本型政治システムをどう評価するかによって分かれてくる。民主主義のルールとして未熟である、と思えば、政策を軸にして国民の信を問う今度の解散は一步前進である。逆に、「自民党の知恵」と呼ばれる融通無碍な方式は、あれはあれで合理的なのだと考えるならば、今回の小泉首相のやり方はルール違反といえる。

小泉首相が本心から郵政法案の成立を望んでいたのであれば、亀井元政調会長、堀内前総務会長といった大物を、最初から党三役や閣内に取り込んでおけば良かった。彼らは本心から郵政民営化に反対しているというより、自分たちにいい思いをさせようとしないう小泉首相に一泡吹かせたかったのだから。あるいは、最終段階で小泉首相がみずからの退陣と引き換えに法案の成立を要請しておけば、やはり法案は成立していた可能性が高い。その場合、小泉首相は自分の信頼が置ける後継者を指名し、影響力を残しつつ、郵政法案の実現を見届けることもできたはずである。

ところがそうはしなかった。どうやら小泉首相にとって重要なことは、郵政民営化の実現よりも、むしろ「自民党をぶっ壊す」ことであつたように見える。実際に今回の政変において、自民党の制度はいくつもぶっ壊れた。政調会における法案の事前審査制度、総務会における全会一致原則、そして閣議における解散を、首相の一存で決めてしまうことも。これらは法的な裏づけのない単なる慣習であるのだけれど、「みんなが何となくそう思っていること」はすべからず制度の一部なのである。

たとえば長期雇用慣行（終身雇用制）という日本企業のルールには、法的な根拠はかならずしも存在しない。しかし、世間の多数派がそれを信じている場合、終身雇用は立派な制度として通用する。逆に信用が失われてしまえば、有名無実の存在となる。1993年に音響機器大手のパイオニアが、35人の管理職に対し早期退職を勧告したときは、事実上の指名解雇として大きな社会問題となった。ところが先月、三洋電機が発表した大リストラ計画は、国内8000人、海外6000人の人員削減を含むものであつたが、非難する声は微々たるものであつた。過去12年の間に人々の認識は大きく変化し、結果として制度自体も変わったのである。

慣習を壊すことは容易ではない。最初に壊す人は、強烈な反対と抵抗と非難を覚悟しなければならない。相当な蛮勇の持ち主でなければ不可能であろう。織田信長に強い思い入れを持つといわれる小泉首相は、その稀有な存在といつていいだろう。

## 変容する自民党のルール

郵政法案に反対票を投じた議員の多くが、「まさか小泉さんは解散しないだろう（できないだろう）」と見ていたことは、今となつては勘違い、もしくは甘い見通しであつたように見える。しかし閣議の反対を押し切ってまで、小泉首相が国会を解散してしまうことは、従来の永田町の常識では考えられないことだつた。解散に反対する議員を全員罷免して、それを全部自分が兼任し、解散証書への署名を求める。理屈では分かっている、その通りにはなかなかできないものだし、事実、歴代の総理がためらつたことでもあつた。

ところが小泉首相はそれをやってしまった。「ゴルディアスの結び目」の故事を髣髴とさせるような決断といえよう。思えば過去の自民政権における閣僚は、派閥の推薦を受けて選ばれた人たちであった。そのため、いかに強力な総裁といえども、罷免することには遠慮があった。その点、小泉内閣の閣僚は全員が「一本釣り」で決めた人であるから、遠慮なくクビが切れるのである。自民党における制度の変更は、着々と進んでいたのである。

このように見てくると、党執行部が郵政法案に反対した議員に「刺客」を送り込んでいることも、自民党の「制度変更」の一環と見るべきであろう。是非さておいて、自民党は変わりつつある。おそらく選挙後の自民党は、党総裁の指導力が強くなり、逆に党三役や派閥の長は弱体化するだろう。良い面で言えば、党として政策面の一体感が強まり、もたれあい体質などの旧弊が改められる。それと同時に、組織における日本的な情緒性や、過去の政局で示してきた柔軟性も失われることになるのだろう。

森前首相は、8月23日の産経新聞のインタビューに答えて次のように応えている。

森喜朗元首相との一問一答 自民党は情の通わない集団になっていく（抄録）

- - 自民党は反対派への対立候補擁立で混乱している  
「一人一殺的な選挙でいいのか。波が去って静かになったときどうなるのか。多くの人は傷つき、心にヒビが入り、刃が突き刺さり、いろんな残骸（ざんがい）が残るのではないか」
- - 解散は小泉首相らしい手法だが  
「小泉さんは他から変な風を起こされないよう自ら大旋風を巻き起こしているが、ずっと続くのかね。日本人の感性から言えば『それはちょっと』ということもある。傷口が大きすぎるから終わった後の收拾はどうするのか」
- - 選挙を通じて自民党は変わるか  
「良くもあしくも変わるだろう。党として選挙をどう考えるか。奇抜なことをやって受ければ選挙に出られるということになったら、その人たちは一体どういう政治をやろうとしているんだとなる。地域代表として民意をくみ取るのが代議士ではなかったのか」
- - 自民党はどういう政党になるか  
「ギラギラした政党になるのかな…。情の通わない集団になっていくかもしれない。ロボット社会みたいな…」

森前首相は自民党幹事長を長く務め、党内を熟知した「ミスター自民党」的な人物である。同時に小泉首相の兄貴分であり、「首相の後見役」をもって任じてきた。その当人が、壊れつつある「古き良き自民党」を惜んでいる。その気持ちはわからないではない。自民党内で現在進行中の変化は、「空白の10年」に日本企業の内部で生じたことに似ているからだ。

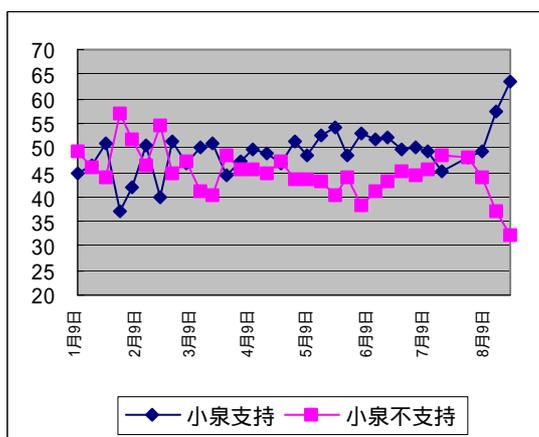
しかるに、そのような古い体質の自民党が、国民の支持を得ていなかったことも確かである。4年前に小泉首相が誕生していなければ、自民党はとっくの昔に政権の座から降ろされただろう。過去4年間の自民党は、小泉人気に寄りかかることで政権を維持してきた。そして今、小泉首相が蛮勇を振るい、ルールを変えて党を新しく作り変えようとしているのであれば、もって瞑すべしというものであろう。

## 読みにくい総選挙の行方

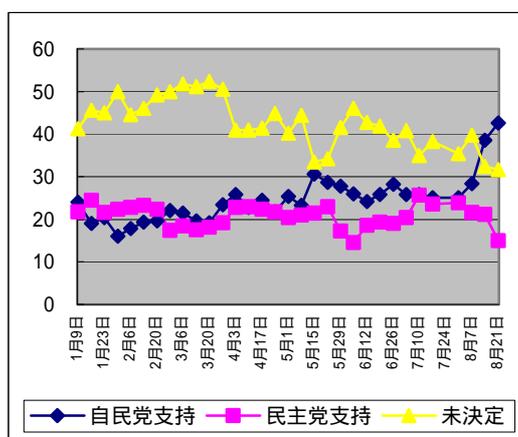
さて、問題は選挙戦の行方である。例によって、フジテレビ『報道2001』の世論調査を手がかりにしてみよう。いずれも今年1年の動きを示しているが、今回の解散・総選挙がいか

にインパクトがあったかは一目瞭然であろう。

### 小泉首相支持率の推移



### 二大政党支持率の推移



これだけのインパクトがあれば、普通に考えれば小泉自民党の勝利は動かないはずである。とはいえ、投票日まではまだ2週間以上ある。過去数回の選挙においては、投票日の直前3日間で流れが変わったこともめずらしくはない。ここに至るまでがイレギュラーな出来事の連続であっただけに、9月11日まで上記のような状態が続く保証はない。

強いて現時点で指摘できるのは、次のようなポイントである。

1. 明らかに苦戦を強いられそうなのが公明党である。巨大な学会の組織を動かすためには時間が必要であり、今回はそのための準備期間がない。まして、最重要課題と位置付けた東京都議会選挙が終わったばかり。投票率も上がりそうなので、これも不利な条件となる。小泉首相が掲げた「自公で過半数」という勝敗ラインは、一般的に「甘い」と見られているようだが、実は公明党が議席を減らすかも知れず、だとすると自民党が220議席くらいは勝つ必要があり、決して安全圏ではない。
2. 自民党としては、小泉首相の人気は上々だが、それを党の追い風にできるかどうかは別問題である。むしろ個々の自民党議員は、深刻なアイデンティティ・クライシスに陥っているように見える。党のルールが変わりつつある中で、党執行部と県連の衝突など、さまざまなトラブルが生じている。制度の変革期にはつきものの現象とはいえ、ひとつ間違えば有権者の見る目は大きく変わってしまうだろう。

3. 国民新党と新党日本は、あまりにも急ごしらえで規模も小さいので、大きな影響力を有するとは考えにくい。「亀井vsホリエモン」など話題には事欠かないものの、9/11選挙は、あくまでも二大政党の対決であると見ておくべきだろう。
4. 民主党は、この選挙で政権奪取のチャンスがある。とはいえ、現状では「風」が吹いておらず、むしろ「郵政法案に反対した」ことがボディブローのように効いているようだ。2003年の総選挙で定着した「マニフェスト」もやや飽きられており、基本的に「敵失頼み」の選挙戦となろう。そして「敵失」の可能性は決して低くない。

### 総選挙後の3つのシナリオ

そんなわけで、世間に流布している選挙予測としても、「自民党の単独過半数も」（夕刊フジ8月24日付け）から、「自公も民主も過半数届かず小泉・岡田ダブル辞任」（週刊文春9月1日号）まで、意見が割れている。ともあれ、総選挙の結果次第で次の3通りのシナリオがあるということ整理しておく必要があるだろう。

#### （1）自公で過半数を制し、小泉首相が続投する（メイン・シナリオ）

選挙後の特別国会において、郵政法案が再採決されるだろう。「またまた参議院で否決される」という可能性は残るものの、総選挙の結果が大差であれば「郵政法案は国民の信を得た」ことになり、参院の投票行動も変わってくるだろう。また、「先に参議院で小幅修正して法案を成立させ、それから衆議院で採決する」などの小技も考えられる。

小泉政権は強力な政治基盤を得ることになる。問題は「ポスト郵政」の課題を何に据えるかで、憲法、税制改正、社会保障改革などさまざまな選択肢があり得る。問題は小泉首相自身が、強い思い入れを有する政策が「種切れ」になっていることと、2006年9月に退陣を明言していることである。それでも、「残り任期が1年を切った首相がレイムダックにならない」という、非常にめずらしいケースが想定される。

#### （2）民主党が第一党となり、岡田政権が発足する（サブ・シナリオ）

民主党が240議席を超える、あるいは共産・社民・無所属票を加えて過半数を超えて、岡田政権が発足する。内政における改革路線は不変だろうが、外交においてはイラクからの自衛隊撤退などが焦点として浮上する。

岡田政権の発足には、いくつもの障害が発生するだろう。真っ先に考えられるのは、「ブッシュ=小泉関係」を失うことによる対米関係の混乱で、自衛隊のイラクからの撤退問題以前に、米国議会はBSE問題で遠慮なく日本叩きを始めることになるだろう。

また、参議院では「民主党・新緑風会」は242議席中84議席しかなく、民主党政権は次の選挙がある2007年7月までは国会運営に苦労しそうである。結局、ある程度の政界再編が伴うことになるだろう。

### (3) 自公で過半数には届かず、民主党も今一步届かない場合（リスク・シナリオ）

週刊文春の第2次予測によれば、自民196、公明30となって与党は226と過半数に達せず、なおかつ民主党も220に留まる。そうすると、「郵政反対自民」15人や国民新党の3人、共産7、社民2、無所属・諸派5人などを含んだ合従連衡ゲームが展開されるだろう。

この場合、福田元官房長官や麻生総務大臣などの中から、新首相選びが始まることになるが、その場合は強い指導力は期待しがたく、政治的なリスクを覚悟する必要があるだろう。

## 経済と政治のデカップリング

最後に今回の選挙の特色として、「日本としては、久々に景気回復期の選挙であること」ことを指摘しておきたい。おそらく1996年の衆議院選挙以降、ほぼ10年ぶりのことではないだろうか。

### ○過去10年の国政選挙

- 1998年参議院選挙（橋本 小淵） 戦後初のマイナス成長。金融機関の破綻が相次ぐ。
- 2000年衆議院選挙（森内閣） ITバブル期だが、選挙の翌月に百貨店そごうが経営破綻。
- 2001年参議院選挙（小泉内閣） 景気はどん底だったが、小泉フィーバーで自民党大勝。
- 2003年衆議院選挙（小泉内閣） 輸出主導による景気拡大始まるも、回復の実感乏しい。
- 2004年参議院選挙（小泉内閣） アテネ五輪景気も、年後半から足踏み状態に。

この10年間、日本の国内政治は経済の危機に直結していた。その根底にあったのは不良債権問題による金融不安である。しかし今年3月にはペイオフ解禁が混乱なく行われ、この問題は名実ともに峠を越したといえる。

郵政法案が否決され、永田町が予想外の解散・総選挙に突入したとき、株価は下げるところかむしろ1万2000円台を突破した。政治の空白が経済の混乱を招く、という市場の反応は過去のものとなった。10年近く続いた「日本経済の非常時モード」は終息しつつある。

市場では、「外国人投資家が小泉首相の勝利を確信して日本株を買っている」と伝えられている。実際、「民主党政権誕生でも、改革路線に後戻りはない」という読みも可能である（『The Economist』誌の論調も同様であることは次ページを参照）。

それでは、仮に前述の第3のリスク・シナリオが実現した場合、日本株は投げ売りになるのだろうか。筆者は、そうはならない気がしている。現在の株価の上昇は、实体经济の回復を素直に反映したものであって、政治はそれほど重要なテーマではなくなっているのではないか。つまり、政治の混乱が続いても日本経済は困らない、ということになる。本当にそうだとすれば、しばらくはこの発想に慣れるまで時間がかかるかもしれない。

< 今週の”The Economist”誌から >

”The bravery of Junichiro Koizumi”

Cover story

「小泉純一郎の勇気」

August 13<sup>th</sup> 2005

\* 正確には「先週号の」The Economist誌からです。日本政治のニュースが久々にカバーストーリーとなり、なおかつ西側メディアの代表的な見方を伝えています。

< 要旨 >

歌舞伎の筋書きでは、この世では添え遂げない同士が、最後は無理心中する。小泉純一郎という市場重視の改革者と、「大きな政府」でこの国を支配してきた自民党は、そもそもあり得ない組み合わせだった。怒号と策謀がうごめく中で、小泉は衆議院を解散し、9月11日の総選挙を決めた。ただしこれは、相思相愛ではなく憎しみの心中なのだ。

小泉は賭けている。郵政民営化に反対した37議員を排除することにより、意図的に党の分裂を招いた。そのことで野党民主党に政権を奪われるかもしれない。日本政治としてはめずらしいドラマであるが、これは歓迎すべき筋書きである。

小泉が赫々たる勝利を収めれば、強い自民党を率いて次の改革に挑むことが考えられる。だが無理心中が失敗した場合も、日本と小泉にとって悪くない結果となるだろう。小泉と民主党の間の討論は、改革は是か非かではなくなっている。たとえ民主党が勝ったとしても、小泉が注入した改革の精神は、日本政治の血流の中に脈々と流れているからだ。

小泉は時間を無駄にし、本誌を含む支持者を苛立たせてきた。彼が政権についたとき、日本は11年にわたる混迷の中にあり、改革を迫るほどの危機もなく、漸進的な改革には既得権勢力が強すぎた。銀行は不良債権が山積し、公的部門の赤字はGDP比8%に近づき、企業は過剰設備を抱え、物価は下落した。自民党は公共投資を大盤振る舞いするばかりだった。

小泉の登場は待たれていた。彼は数十年来、郵政事業を民営化せよという、奇妙な、しかしこの国の金融と政治の中核課題に執念を燃やしてきた。この国の郵便局は手紙を届けるだけでなく、3兆ドルの資金を有する世界最大の銀行である。この資金が「第2の予算」として公的分野に流れている。この流れを壊せば、この国を良い方向に向けることができる。しかし、建設企業や郵便局員、公務員などからなる党内反対勢力は巨大だった。道路公団の民営化は骨抜きにされた。郵政民営化も2017年が目処なのに、それすら失敗した。

小泉が成し遂げたことは数多くある。金融当局を強力に独立した存在に変えた。公共投資を対GDP比8%から5%に下げた。首相の権限も強めた。この間に、時間と企業リストラと対中輸出が経済を癒した。この間のイラク派兵などの積極外交も忘れてはならない。

小泉が勝利し、小さな政府と経済の自由化に国民の信を得れば大いに結構なことだ。だが、自民党が見離されても、その場合は民主党が自由化を推進しよう。これだけ時間がかかったことは日本にとって悲劇であったが、今こそ大団円に向かって見えているように見える。

## < From the Editor > 刺客と教育（模範解答）

僕の名は大五郎。父は挿一刀という政治家です。母は、僕が生まれたときの選挙戦が大変な激戦で、そのときの過労と心労が原因で死んでしまいました。父はとても嘆いて、まだ赤ん坊であった僕に向かい、自分の愛用のマイクとお母さんの形見の鞠をつきつけ、どちらを取るか迫ったそうです。

「大五郎、マイクを取ればワシと同じ冥府魔道に生きる政治家、鞠を取れば母と同じ黄泉の国に送ってやろう。さあ、選べ、選ぶんだ、大五郎！」

まだ赤ん坊であった僕はよく分からずにマイクを取り、父の後を継ぐことが決まりました。父は「亡き母の方へ行った方が、お前には幸せであろうが……不憫なやつ」と涙を浮かべたそうです。

そしてその日から、父と子の政治家修行が始まりました。

「いいか大五郎。ワシはお前に大五郎という今時めずらしい名前を付けた。いつの日かお前が立候補するとき、それだけで一万票は増えるであろう。いいか、有権者というのは、それくらい何も考えておらん。だが、ワシらは違う。必死に頭を使って、地盤と看板とカバンを守って生きていかなければ選挙には勝てぬ。そして選挙に負ければ、死んだも同然だ。このことをよく覚えておけ」

父は選挙になるといつも勝ちました。父は立会演説のときに僕を連れて行き、客寄せに使いました。僕は足が弱いことになっていて、いつも車椅子に乗っていました。主婦層はそれだけで胸がいっぱいになるようでした。

「父一人子一人の孤独な戦いです。どうかよろしくご支援ください！」

そんな父の訴えはとても効果的でした。政策の話などはしなくても、厚い同情票に守られて、父は選挙に強いという評判を得ていました。

ときには父は仕事が忙しく、何日も帰ってこないことがありました。そんなとき、僕は腹をすかせてずっと父の帰りを待っていました。そのうち、自分でインスタント食品を調理することを覚えました。あれは確か、ボンカレーという商品だったと思います。近所の人たちは、「腹が減っても、じっと我慢の子であった」と感心してくれたのを覚えています。

そんなある日、党の執行部の命令で父はお国替えを命じられました。党の決定に造反した議員を、総裁がどうしても落選させたいということで、相手候補として急きょ選挙に強い父が借り出されたのです。後援会の人たちは困りましたが、父はひとことも文句を言わずにお国替えを受諾し、僕に向かってこう言ったのです。

「地獄に行くぞ、大五郎」

苦しい選挙戦が始まりました。相手候補は新党を作って不利な戦いでしたが、こちらも見知らぬ選挙区で苦労の連続でした。それでも、車椅子を使った「父一人子一人の孤独な戦い」作戦は好評で、両者の支持率は横一線で推移しました。

いよいよ投票日を翌日に控え、立会演説会が行なわれました。相手候補のカメイ氏は、党を追い出された恨みつらみを切々と訴えました。

「いいですか、皆さん。党の公認を与えないだけならともかく、わざわざ他所の地区の挿一刀議員をですな、刺客としてこの選挙区にぶつけてきたのですよ。なんという残酷な振る舞いでありましょうか」

僕は車椅子に仕掛けてあるスイッチを入れました。(実はこの車椅子は、ものすごいハイテク兵器なのです)。すると大音量で、あの歌が流れ始めたのです。

しとしとぴっちゃん しとしとぴっちゃん しとしとぴっちゃん  
悲しく冷たい 雨すだれ  
幼い心を 凍てつかせ  
帰らぬちゃんを 待っている  
ちゃんの仕事は 刺客(しかく)ぞな

涙隠して 人を斬る  
帰っちゃあいいが 帰らんときゃあ  
この子も雨ン中 骨になる  
この子も雨ン中 骨になる

ああ 大五郎 まだ三つ

(「子連れ狼」小池一雄作詞・吉田正作曲)

聴衆はもらい泣きを始めていました。もはやカメイ候補の演説に耳を傾けるものは誰もおらず、立会演説会の流れは決定的なものになっていました。カメイ候補は叫びました。

「汚いぞ、挿一刀！ こんな子供を選挙のだしに使うとは！」

そのとき、父は毅然としてこう答えたのです。

「ワシらは親子ともども冥府魔道に生きておる。普通の人間と思ってもらっては困る」

そんな父を、僕は心から誇らしいと思いました。

\*この解答を送っても、国民新党の候補者公募には受からないと思いますので、念のため。それにしても、「刺客」を「しきゃく」と読む政治家やコメンテーターが多いのは残念です。皆さん、『子連れ狼』を見てなかったのかなあ？

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記にてお願いします。

〒107-0052 東京都港区赤坂2-14-27 <http://www.sojitz-soken.com/ri/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)5520-2195 FAX:(03)5520-4954

E-MAIL: [yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com](mailto:yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com)